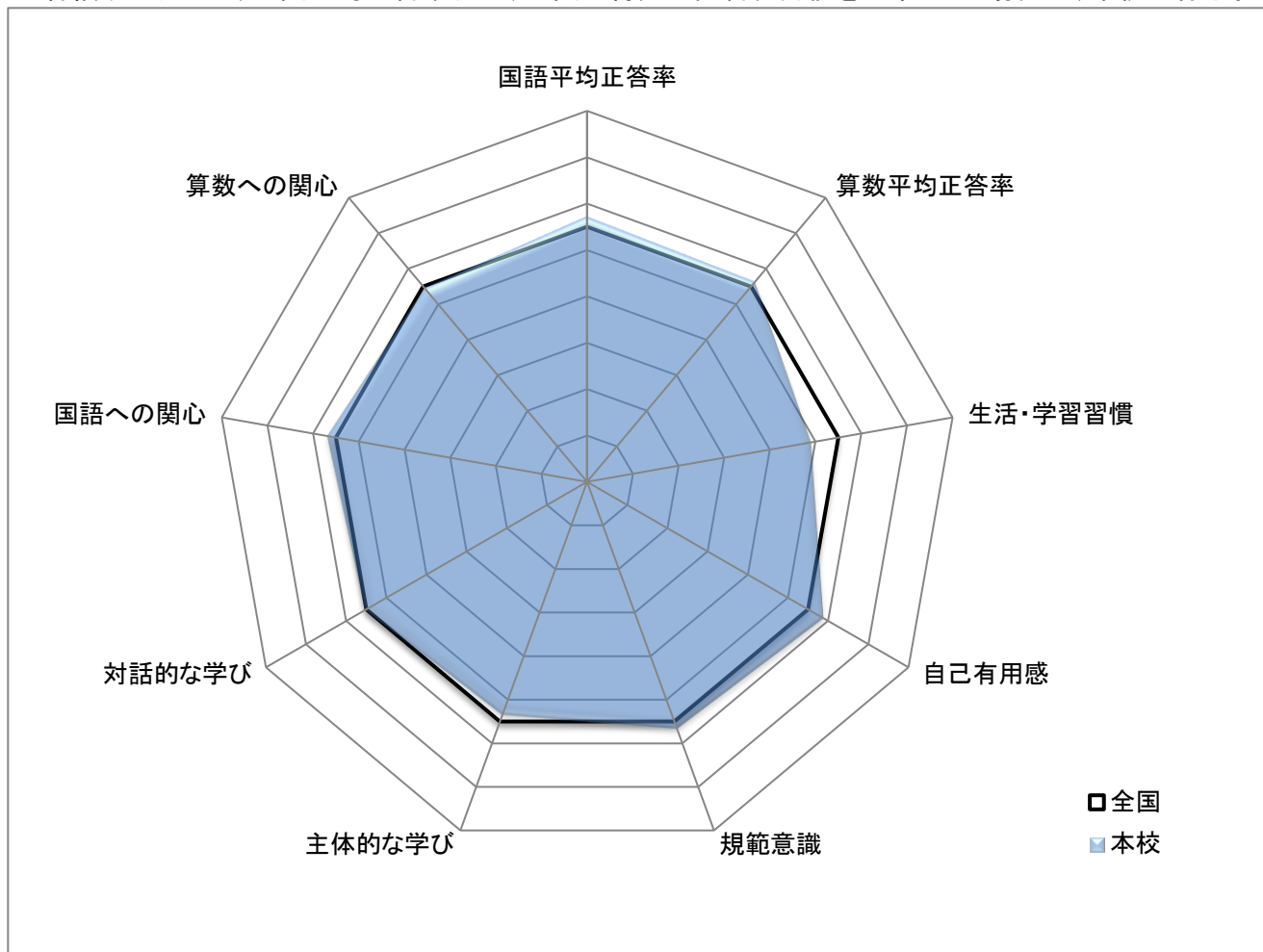


●各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《現状把握》

教科別に、得点率をA層B層C層D層と分けた時、昨年度に比べ、B層の割合が大変高くなった。正答数分布グラフを見ても、無答の児童がいない。これは、例えば記述式において書く型を学んだこと、音読を重視して、問題文を正確に読めるようにしてきたことで、CD層の児童が、問われたことを理解し、自分なりに考えを書くことができるようになったからだと考えられる。今後は、授業時間外や家庭学習などでも、興味関心をもったことについて、自力で解決できるような学び方を身に付けさせたい。

《授業改善のポイント》

特に算数科において、既習事項を活かし「前が△△ということ学びました。このことから今度は□□になるのではないかと考えられます。」というように、身に付けた学習事項を根拠にして、未習の学習結果を考えられるように指導する。ノートには、計算式だけでなく、言葉や式、図などを使って自分の考えを表せるようにする。学習のまとめを書かせることで、自分の考えを言葉で表すことを習慣化させるようにする。自分の考えがもてるように、全ての教科において、「比較する」「関連付ける」「分類する」「類推する」など、考える手段や方法を指導していく。現在でも、自己有用感が高いが、自分で学習課題を解決し、満足感、達成感を得るような学習の成功体験をもっと積み重ねることで、自己有用感もますます高まり、さらに国語科、算数科の正答率も高まっていくものと思われる。

《チャートの特徴》

大きな特徴は、自己有用感が非常に高いということである。昨年度までの本校児童の結果と比べても、全国平均と比べても高い。主体的・対話的に学んでいる中で、自分の考えが大切にされ、習熟して身に付けた学習事項が活かされていることを実感しているのだと考えられる。また「将来の夢や目標を持っている」「先生によいところを認めてもらっている」という数値も高い。目標に向かって努力している姿を、担任や教職員に褒められ認められていることを数多く体験し、そのことが、さらに学習に主体的に向かわせ、疑問や課題などを「自分の力で解決したい」「分かるようになりたい」「できるようになりたい」という気持ちが高まり、スパイラル的に向上している。

《家庭・地域への働きかけ》

語彙力が不足していることを受け、小さいうちから、読み聞かせや親子読書など、活字や言葉に触れる機会を増やしていくように働きかける。また、学力が高い児童とそうでない児童との学力差が二極化しつつある。全家庭に、家庭学習の習慣化を促したい。